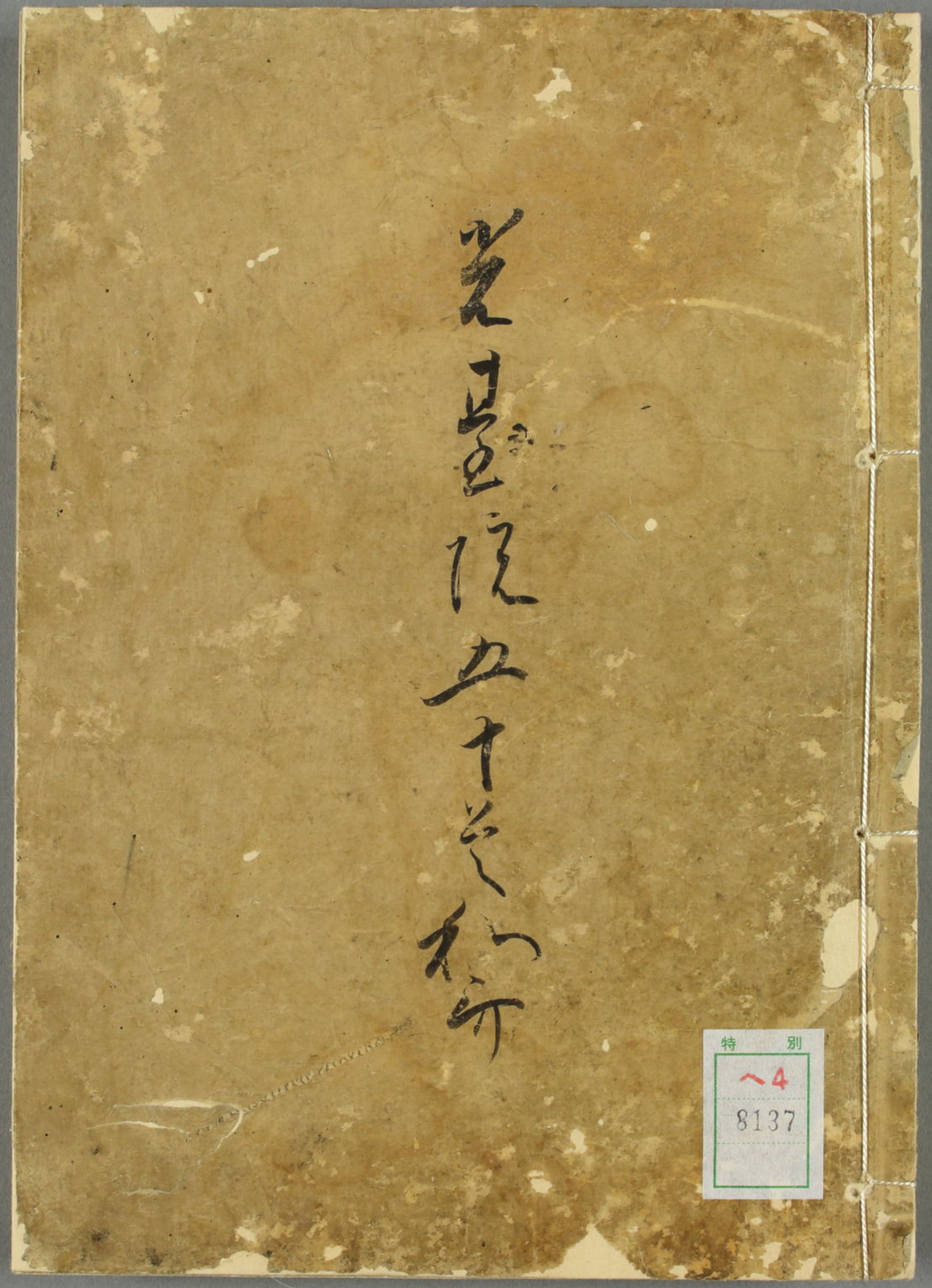
特別
へ4
8137

貴
14
8137

光臺院乙十首和謌

哥人 并御點目録

清堂
道助法親王 九十二首
常盤井入道太政大臣
公経 右大將公經
西園寺入道太政大臣
藤原雅経 十九首
藤原宣家 九首
藤原家衡 一首
藤原保季 三首
藤原定家 七首
藤原信實 二首
藤原家隆 九十八首
藤原為家 二首
藤原為氏 七首
藤原行能 一首
藤原定家 六十七首
藤原為家 七首
藤原為氏 七首
藤原信實 二首
藤原為家 十一首
藤原幸清 十一首
藤原定家 十二首

僧經家　　四首

富士浦荻原光經　三首

河内守荻原秀能　十八首

但馬守源家長　四首

荻原孝継　八首

僧俊禪　六首

題

春十二首

初春　雪中鶯

行春　春月

梅　遠帰雁

桜　春雨

藤花　夏七首

杜鵑花　早苗

郭公　夏の橋

江螢

秋十二首

橋邊霞

岸柳

山花

河蛙

墨郭公

雜田雁麦

早秋　萩露落　萩風
尋虫聲　山家月　野徑月
船中月　曉廉　河霧
橋衣幽　夕紅葉　殘菊白

冬七首

朝時雨　行霜　池水鳥
海苔千鳥　松雪　湖雪
惜歲暮

立六首

寄雪恋　寄月恋　寄燈恋
寄花恋

雜六首

嘆述懷　雨中燈　山旅
海旅　野旅　寄松祝

春

初春

春とたつよ立ちかはりしるの松のかゝり枝をさうりめる

大將

立初る霞の衣うちかけて春をそしらるる宮の山ぢ端

實氏

降雪はしら玉もちらしゝ久方の宮ぢの春やきあらん

宣家

春のうてゝ札もまそでやゝかすめつるふゆかするこのうたを

雅經

久方の天の原にのむらしまの雲にまがへる雪の下草

家衡

名残をしてそれとはなしに見るとなき雪の色かな

家隆

千鳥川水の流るるかけよりわけ出る波のむせまさる

保季

浅みとも思ひ入ぬる風の波なれぬる雪の初山

知家

雪ふるく雪の下草雪の出て波もみどりの雪はたりわ

定範

とゝ鳴ふる山ゝ雪ふる成ぬるまのの原

範宗

山の端のうたむりを雪の色ぬるもいとやきぬ

信実

雪ふるて嶺の松ぬ出ふるうしとよるる山のまくら

行能

嶺のうたらの雪ふるてゆきとうたき嶺の雪ら雪

幸清

朝ぬ雪ふるとなる雪つ民の里をもふるしまいとはもつ

定宣

春の色はいとうすきをもてあそぶ雪のゆふぐれ

澄昭

仏つくりの春はとて雪のゆくすゑもうとうとしき

経泰

ゆかしき雪はこの春はいとめでたきやきあるいと

家長

白雪の春はいとうとうとしきもうとうとしきてり

光経

春の雪はいとうとうやまり春らん

教継

立ぬる春の雪風よりとけぬ梅の花ゆくらん

秀能

春の雪はいかなるわかれにかはるらん

信孝

春ふるとはかりのよそにふりそめしかさしたる雪の春成

雪中雪

梅ゆくはこころの雪とよ雪成ものもさもくあるかな

大將

うちきしなまくぬ雪の花成よ梅ゆくはるの雪成

實氏

春やとき草の葉もまだしらぬ雪の中よりもとをしたてる蕨

宣家

松の葉にもゆる雪のあはれとてうぐひすぞなく

雅經

春となく秋とわかれて雪のそらもとまれる雪にうつりて

家衡

春やとき雪を花とみてやどりにうぐひすぞなく

家隆

雪の雪ぞ梅をひろひていろをしるべし

俊重

ふるしやさむき雪の殿をふきまよふ雪

知家

しいとて春をいそぎて雪ぞけもきえぬ山のしら雪

定範

なるみのゝ春をたづねて雪の中をまれこそ時

花宗

雪ぞ花をもとめいまこそ春のそらに

信實

ちさかぬ水鶯の梅を雪ぞ本つたひすまぬあと雪

行能

雪ふりし谷の梅をその里のとかけれしとしるる人やなき

幸清

秋のよはしるるに雪の降もまさる梅の匂ひ

光宣

梅の枝をるとはなしに雪ふりて花とまがへる梅の匂ひ

隆昭

梅うえしうしるる雪を花とみて宿ありけりと思ふ梅

経宗

谷の戸やまだ雪深き雪ふるとも経ぬるうぐひす

家長

あい雪のあはれ分いふりゆきとまるる梅の散

光経

やどの梅を雪と見てふる雪の雪もまれなるうぐひす

孝継

初雪はまだ雪よりあるる梅の匂ひとけしきの春の雪

秀能

折とる袖もこほる雪の中よみうしろもるうぐひす

俊経

梅雪をとさそふ中の花とやいふほの風よ雪ちらす

橘為忠

[illegible]

大將

[illegible]

宣氏

[illegible]

宣家

[illegible]

雅經

[illegible]

家衡

[illegible]

家淳

[illegible]

保季

[illegible]

知家

[illegible]

宣範

[illegible]

範宗

山の端を雲のひまより見渡せば月の影のみ清き秋の夜

信実

はし柱ちるやいつく春ぬれ濡いろこそあらて

行能

ぬれぬれと野やとてさう春雨のみのうらもまのて

幸清

うしさらぬ雲もたてよ今ふたて世を宮法橋の行方もしら

光宮

橋姫の待しよすも色ちらし雲吹けや宮法の川風

俊成

岩橋の絶ぬ言とて契らまし何をたえぬ雲の端

經宗

書ふて雲の絶ぬるかねてやあ東ぬ見宮法の橋姫

家長

見渡せば雲の浪よりきこえつふ法て撫岡の上橋

中之經

白雲の涙の北橋もひたすらあまて立雲ぬ

若継

絶ぬ法ひ人の橋北部の橋の雲の浪の

秀能

春ふかき霞の衣たちぬれば
やがて花の香ぞ袖にうつれる

俊成

行く春

たのしみをもとめてぞ春はくれぬる
ちりぬるかぜの花のなごりに

大將

春の道ゆきふりぬれば花もみな
道のなかばのうぐひすの声

宮民

春の雪

花の色はうつりにけりいたづらに
わが身よにふるながめせしまに

宮家

玉鉾のゆくてにうつる梅もうて白ひの人をうらめし

雅經

分入るぬるほひ梅の花は袖にもうつるうぐひす

家卿

春風のなびかぬ梅もなかりけり

家隆

俊成卿の住吉に梅の下風

俊重

ひとしほ梅の花の匂ひ

家

道の辺の人目よ梅花梅ちらす風の吹ぬる

白花

墨ぬぬぬぬぬぬぬ梅香を尋ねて梅をさそ

花宗

梅の花ちるさかりの人の世梅のうきなも人をうる

信実

踏ならす山もりてる長谷寺の梅のトりけ

行能

青柳の糸の梅花ちる風の吹あらしをしる

幸清

玉鉾の道ゆきぶりの梅花むきしをしの人の袖やふるらん

光宣

吹をる風を形むの人の梅の白を

隆昭

ちる梅の白雪ちるさき梅うに中く雪ぬまをひろ

経宗

道の一ちの光ぬ梅の花ちるよ多ちも袖ちるほひ和ん

家長

人いさ袖をやもとうん梅花ちるこまうの白ひ川く

光俊

そこの人はなほのかなる梅を袖の匂ひにうつる

左野宰相の中将の梅のまへに月のあかきに

若菜

わかさをそなへかねて秋ふかくなりぬる梅の花

秀能

ちりぬるかぜ

春月

白雪の花とのみこそ見えしかど梅にうつれる

後鳥羽

春の月

白雪の花とのみこそ見えしかど梅にうつれる

大将

花さかぬ枝のうへも新やたまくらの春の宿の月

寶氏

山の端より花の梢にうつる月もちるのゆふひにうつれる

宣家

山は霞ものの光もうすくにしてふるさとの春の月

イ三位

雅經

常盤なる松のみどりのうへにそそいでいりもむ春のよの月

家衡

大空の月ふかくもみえぬるかな春の霞のうすくたなびくの月

赤染

雲ハ野原方の春風吹たちそへる夕ゆふ雲

俊季

大ふけ春ハ勝のふけ渡るとて春ハ月ハ

知家

とりとめ野花ハ見ぬ春のさくらのもとうつろふ月

うつ花

当世やわらふ塔さ山の端ハ月ハ入ぬ

花京

春ハ人やなりぬらんくもむらよりハ月ともとハ春ハ

信ふ

立ぬる山ハ月ハ海ハ春の夜月

行能

海ハ春ハ月ハ春ハ新しく春ハ春の月

幸清

独ハ人てさしつらん春の夜月もとハ春ハ

芝宮

心ハ勝なりぬ春のよハ月ハ春ハ

陸奥

そハ海ハ花の春ハ月の春ハ

風うたくもり春のよの月

海ハ春ハ月ハ春ハ

為氏

春長

ゆふさよは月ともとは光のへたてなき霞の末はのこりし火

光経

久堅の空の吹はらふ春風に霞くもらぬやまの端の月

孝継

大空はくもりもはてぬ春のよはなかなかこゝろの窓の月影

秀能

春きてもまたさえかへる嵐こそ和草のうへにかゝる霜の有明

隆祐

庭せまき所の梅はちりてしもわか手まて移る春の夜の月

岸柳

青柳は糸よりかくる枝毎に乱れて流るゝ水の上そと

大将

春風の吹雨は岸の柳はなひきぬなからのした葉

実氏

おもひやる三室の岸は柳京霞はるかに春風に袖く

定家

岸くらし川の上を跡にして花散そのの岸は青柳

雅経

岩上川さしこめて流るゝ水のたはむるゝ岸の青柳

家衡

淺みどり花の色移りにけりいたづらに我が身世に経る長雨

家隆

沼水川をひく堰に水はてて苗の移りの色見えぬく

保季

高川岸の柳をこきまぜて花なきもの色ぞ咲きて

知家

高川下もふかきみどりと新しき花の色移

見渡せば川そひ柳色そへて春はなほ新の緑かはれる

花宗

高川岸は柳の枝ぶりやうけ水なびきたる

信実

春柳のうへの水川の春風よりこそ色をあらそ

行能

川瀬のさゝなみにあやめをさそはれ岸の柳色ひくらん

幸清

岸ちかき川そひやなぎ春雨に枝ぬれ色の

芝宮

長き代に上宮の第末代なひくやもとにすむ岸の柳

澄昭

海のうへの春の柳をこそまやて也の柳はいとみどりなる
経宗
業綱卿の春柳うちなびきなびくて春はなる
家長
三河入道の春の柳いとなびくて春はなる
光経
非ひの三位殿の柳はなびくもあるかのうちなる
落葉
うもうもとの春の柳うちなびきなびくも春風の吹
秀能

非ひの三位殿の川柳うちなびくあなたもまたなびく
俊成
うきなまい柳をたてもこの河風のさそいたてあの春の柳
藤原為家
花とうてうるやぬしかなる春のあさ乱のなかに
大将
もの憂面ふりもさむ春の日のなかうもみてあの春の
宮民
なびくいとをつもらん春雨やはるもいとをうなる
宮家

藤花を中風をうれへあまの[illegible]とあるを[illegible]

雅縄

春の日の里人の形見とて身のしろかねさもさこそ

忠俊

ゆかりの八本のみも今ぞ春の面影ばかりなる

家隆

ゆきてやまぬ袖迷ふ春の花をうつす

俊重

今ぞまつる道いとのめも春の花とふるさとの

知家

藤衣ぬれてうゑ神よ春の花

知家　宗花

春の日の光ぞ花をいとをしみ[illegible]

花京

春の日の雪ぬ花をみるひあ春の面そくもさしの春

信実

雪ゆゑの春のさくらひとうゑすす春の花

行能

きのふまてまつ[illegible]花[illegible]春の面そ[illegible]

幸清

吟ずるふ和り山の芸ぶ[illegible]人よ者名ある素面う[illegible]

素面も名ひめり彩もふる[illegible]

光寛

素面のふる[illegible]のうりほけをあらこと彩もとも[illegible]

隆所

吟ゆん[illegible]家の[illegible]ふめし[illegible]素面[illegible]

家光

面もなる[illegible]ふの[illegible]ふりぶさの[illegible]ゆん素面の[illegible]

光経

ふこ[illegible]ふ[illegible]の芸ぶ[illegible]こき我神[illegible]素面[illegible]

孝継

名ひ[illegible]ぶめて素面[illegible]ふめ[illegible]ふの和[illegible]

秀能

[illegible]と[illegible]ぶて素面の[illegible]人も神[illegible]

隆祥

[illegible]の神ぶ別[illegible]ぶめて[illegible]ふ素面ぶ[illegible]

遠嶋屋

別[illegible]ふ[illegible]ぶ[illegible]ひ[illegible]ぶ[illegible]

大将

見る事とゝまりてゝ成もの哉の心の
ゆるるゝさいろゝに成めり
実氏

いく霞もの〻上傍に白雲と共あるゝ人今
雅経

霞もはるの本めもさゝりして花ぬきふるゝ
家衡

やとれ霞をゝて心ゝ雁のよそつき
家隆

霞立春の心を花と見る風ふるゝ今
保季

天雲花ぬきとゝく春ゝの雲ゝの色さゝり
知家

我なりつゝき別を待人の身は花ものゝ
実花

雲と入春をすゝるも消そ面影ゝ心ゝ
花宗

とりやゝ花の白雲ゝ春ゝ心ゝ
信実

時雨れしも雲井もよその月又なき世みちやつれても知り
行能
冬なれと霜ていねる山の端に雨氣のはるゝよの月
泰清
とはれても山風吹して月の行へ雲井まてのこる人篭
光覚
冬ふかき道ゆきかりの(?)も霜にけりなき遠さかりぬる
隆昭
かこつへき雲も霜もなかりけりとをこゝの月にまかるゝ紋
経家
とはゝ又いつくのさそはまし霜ておもふ春のかりかね
家長
春の日は影もつらむ涼しおもひは霜の名残に時雨かり合
光経
時さへ月はなる花にうつりて山のあなたにも遠さかりぬる
孝継
秋の夜もさまも涼しき霜も深かりし雲井の末をそ遠さかりぬる人
秀能
鳴渡る雲井のゆくへ時に山きえても遠さかりぬるつれ
俊成

吟り出きるより山の端よ弥月を招すとい
山花
樗ちるとてもの花とてのこるさの山ようる
大将
梅咲山霧ようつのれてみとるの色よのろーしらもと
宗氏
ちる色をとうの行くようるくいとりほもを
宗
芳川の山梅戸を稀よあるて色ろ有て袖を結ん
雅経

梅もあるとしたかれも梅も多ろ咲ぬし霜の雪風
宗御
山梅とのも雪世の雪を絞ぬもろ月もみうしのさと
家隆
山梅勢ろ咲ひをかし雪乃袖もをなまろもて
保季
吟ろろとこの月世の弱ようる色梅ろろ月ろ
知家
物毎ろわろたちかも雪を絞て色ろ帰ふ嵐の白を
定範
嵐はなれ色ろ色ろ山の端の色のいろう梅ろろん

花宗

花の色は雪にまがふる梅の香を風の便りに吹ぞうつらん

信実

山のはに梅たづねて吹風にうつるかをりの色ぞ

行能

山の端にうつりてあかぬ梅の香を人にとまれる

華清

住人をまちしの梅の花を折せてとて吹あしたの

兵宮

ゆかりの山のわさけそをうらいさ折もとてもとる袖

隆祐

花の色は雪にまがふる梅の香を風の便りに吹ぞ

源宗

春野に梅の香をうつす風の音を

家長

うしの山ふもとに梅を折そをる袖にうつるかをりを

光俊

玉鉾の道の梅を尋ねて袖にうつる香をたづねん

孝継

新家立面の梅乃木のうらにつてをる初梅の

宗尹

[illegible]

白雪ふる櫻さくまもなかりけるの[illegible]

後深

関花

あはれや雪とちるく吹風のいまはこの花の名を知るる

大納

山櫻花の名をしるかぬ白川のせきもるなるふるの山の櫻神よあらしのみ[illegible]

実氏

[illegible]

櫻花多しなの名本ふりにてもとまの雪や此ふるもちん

行能

打ちなびくもとにすむ人の雪ふる吹こゑあるさの[illegible]

家衡

風ふく[illegible]なかりをふる櫻のもとに雪のもちうてしま

家隆

あるかぎりの櫻の花のかをるの雪の枝もち

保重

色みしあの花の香のまやうちうるる白川の雪

知家

桜色の衣はきさらきの春風よりはなれぬこのもみちそまる

宣苑

花ならぬにほひもあるかやまとや春はもろこしの雲の嵐よ

範宗

白川の雲ぬれつゝけさあしたにもさそひくる春の曙

信実

春雨に春のかゝりてぬるもあらはや雲の杉つゝよしのやま

白雲

行能

逢坂の雲をもさきぬけに代なれしもそてなる人やたつらん

幸清

世にあれはさきまの春におほ坂の雲路ならもよにかよふらしつ

光覚

ちりぬるも見ん桜てなる人もあらしもよ風も白川の雲

隆祐

清見かた桜咲ぬれはも山風に塩干も志らぬ浪の雲なる

経宗

ことのはの雲のうへなる若そありしのさきかる逢坂のもとる

家長

葉てぬさもみちあへもておほ坂の花はもろし黒実のまゝに

光経

人あてうちもてそそろう橘也家の実は青のゆふれ

実のみを人のめのかりうきはなよりもをさそひてうる青々

芳雄

ふるもはけやいとうるあ雪の雪ちのうきうめ

青ねこ雪のいとあらはれもいと新しくもうらはゆるうめ

後藤

庭花

庭の角よこうもやはのうけはうしふよりおよりもの青ちと

大切

ふめ形重てゞ人を回うこと風吹けよもの白雪

実氏

回せつる人のうちうもうすあと沿うき花の白雪

白雪

沿絵て回せこぬ庭の苔はしたもとうわうもう新く

雅絵

雪ちのうきはうしのもあれと高うこ庭の行や沿ん

東卿

こぬ人をうこもはて橘也家の橘ちうこ庭の橘ちうこ於

東隆

山家遠し梢のちりハ数よりも風のしたなる庭の白雪
保季

さらに残りおほし春深き庭の花をそなくとも
知家

年を経て花の白雪積りける茂き蓬の宿の春をも
定花

ちるもとの梢をふかみ庭くまもまだきにつもる春の雪それを
範宗

山里は軒端の桜吹く風にうらみてもとふ人もなし
信実

梢ハ春を楽しみて散る花の雪ハあらぬ庭のしら雪原
行能

同しくもうつろひそめし庭の面ハちりもせて待へ人ハなし
幸清

雪とふる花ハさそへぬ庭の面に梢も共に風ぞ吹ける
覚寛

春来ても雪ぬ庭の梅もちらぬさきにわ人そまつ
きさ
隆昭

かきくもれ咲ける花に見えて雲の下なる庭のまそふ
経家

みとせよりのち吹ものあるとき人うゐ屋のさくら

屋のもとに咲もの桜ゆへのうるはしくなるさまに

之經

なのつゝみうるはしもうるはしくもうるはしく花ちる屋のあさきさまする

孝継

人人風を吹ものあるとき屋に花ちりつもるあさ

秀能

わさとかはる屋に吹まゝ白ちりよる桜

俊頼

河辺

菊の川いはそそろふらん吹も春の日影をもつゝ世ゆる

大江

菊をうる山吹の淵に月さゆる山吹の川長

六条民

うきしまの中うゝ人のあさ咲めれて山路のゝ吹花

宣家

山吹の花もちりぬ川波の入ハ下りそあて

雅經

やまふきの井手の里人めやすもいとゝ春の川なみ
家衡

くちなしのそめての川なみ打出てうともいはしものさわかは
為隆

かへる雁なきさ川もひそなきさ影はいはてゝ山吹のいろ
保季

萩ぬるうかへ春ゝぬ山吹のにほひまなくてかその川なみ
知家

舊瀬川邊ぬれぬ秋の水はまつろ花の山吹
定範

よしの川岸山吹こきまぜて春の錦をあらふ白なみ
範宗

よしの河岩こす波もうつろひぬこそ御れし山吹の色
信実

ゆく春の形見を橘の小嶋にもまつる山吹の色
行能

山吹の色もせさらは見えすなれはそのつゆは咲てくらさよ
幸清

風ふきさのうつろふもやさけひ人浪に落る井手の川なみ
道覚

衣手よりこその川浪くゝりきて立よりてそ折つゝ山吹の花
澄昭
吉野川桜にかへて春の色も見しやまとなる岸の山吹
継宗
春のもり川瀬の浪にぬれしもしらるゝをかしぬ山吹の花
家長
いはぬをもるともも山吹の色をそこそこ見る井手にさくらん
光経
山吹の花咲しより吉野川岸の波さへ春のさかり
孝継

吉野川春もなかはの雨にをりをり岸の山吹
秀能
よしの川岸ねの水に今よりも春まて遠く山吹の花
信実
咲ころよりも水の面影川辺そ知しさきしの山吹
又
秋部也
住吉やまかしておもひくれ色そ澗のきしくゝれ部也
大将
うけ山部花月まつ秋のなかくちやの秋の部の秋
恒

寒氏

世

春の月花をよそに咲くらん

宣家

清輝朝臣

春ごとに梅のさかりやうつるらん白くうるはる雪

雅経

春まつる月のもとに咲ぬれば花の面影にて

家衡

白雪の春のさかりに咲ぬれば花の月影ぞ春のあるなる

家隆

春恒の咲やあるらん花の色の匂ひ

俊重

春恒の咲やあるらん花の枝にうぐいす

知家

春恒の中に咲川の咲ぬれば

定雅

春代るとやうけて咲ぬれば花あまたる月ぞ

花京

五月雨の山の杜の梢にうぐいす

俊宣

川の船よりてぬ船も咲ぬれば花ぞ

天津神の命のみことのりを聞きたまふ事

行能

高市皇子尊の宮の内侍

幸清

伊勢の斎宮の内侍

芝宮

伊勢の斎宮の内侍

隆房

冷泉

経秀

家長

藤原公教の下臣

芝綱

伊勢の斎宮の内侍

芳継

伊勢の斎宮の内侍

秀能

伊勢の斎宮の内侍

俊経

伊勢の斎宮の内侍

早苗多

ムラ
村毎よりとり手除かきつの苗とりのもりふも能あるして

大内

とり幾日多墨の田子の反もあるて盛て子苗に種まきまあ

社イ

白久民

ちの
ちゝ田子の苗とりやとりつゝ子苗とりこゝろ

らし寄

種ちゝとせるとの子苗墨毎に民の子ちの形をんて作形

雅経

種ちゝとて多墨の田子に苗とりつもの苗れこゝろ

家衡

村ちゝとれもつきれ引きあれかまてあまりつの苗なりこん

家隆

引墨の多の形田に子苗墨てこゝ毎の形とりこ代の民に

保重

苗墨てこゝ毎の形とりこ代の民に

苗ちゝなり多町のつの苗れ

知家

苗ちゝ田道ある毎にこゝ民の子形ちゝてしこゝ子苗の

こゝ泥

苗ちゝ毎に多町のつの苗引つれて形こゝ田子の形もちゝ毎て

立ちて民の山立も形そひてしるしの町の札の前なり　反

花宗

信宗

往てあきまねき年の正月あり立田の沢もとの前札なりや

行能

多勝や左衛門民也形そひて前の方前こゝ札なりなき

幸信

墨つけ者田の角よりつゝきて形そふ民の方前札なり

芝宗

墨毎の角の形そふ立ち世ゝ立ちあまりつの前如ならや

隆能

左ゝすの前にあり山立の名あり（き角ゝの月ゝ　妹イ

維宗

墨きてとしとつきをめつの前ゝわりもて来ての秋みて

宗長

ちの下ひろき田角より立民もとる前の屋もかもの

少弘

ゝ多日田ゝの墨ゝとゝのゝ町の前札ゝもゝ

孝継

ちの下ゝ走りゝめゝゝ田屋ゝりこゝきゝあゝしるの前

早苗とりわけ立田姫の恵にしたがひ稲葉をそ

秀能

墨をりぬる宵の口萩はなれ初てよ恋の色はやうつる人

俊成

墨部 乙

色深くなほ濃まさるふの里の墨はなをし部なりしを向

大将

とも深やさそふ時雨ゆふ月のさとりなりけり

公氏

中墨よ今もなりし部にたにしてくるこそのを数

うら

時雨なほ濃まさるふの里あるきものをりの墨をしたしん

雅経

色をそて墨とふ人も時ふるは山彦の我のこそ聞くなく

家衡

中墨の月の錦をとるく時雨ふる山の月の色

中務

白雲の紅葉をとりて時雨なりや初月は山川のそて

保季

うつりきて伏見の里は墨とふ時雨ふる

行う志のふかきの心ざしの墨はりたれの変
知家
時雨いつとうの墨かれて染むのうれ行きのみうん
花京
鄙ちかき山里ふるあかりの暮むとみうん
信実
とう命や伏見の里は時雨まさるる鳴乃こえ
行能
言葉のわれらの里の時雨帰りの書を行う志のり
幸清
たの里(とひ三うん)鄙ちかきそうそう鳴
兄宣
鳴捨て点ちるるこそ時雨なり春の里は秋し
隆昭
里りうすあけや春の山は時雨の江をうる春
鎌倉
尾ちくやい伏見の里は行きもれ人侍ちあ和歌行
家長
源氏の里をいうもあ鄙ちかき鳴まと行うもし

芝經

春秋七夕の夢盤の墨によりて詠する部

孝継

きりぎりす鳴くなる時の月をもてまて時雨かなる秋の墨の定めの定

秀能

今はとて行末しらぬ時雨かな山の墨と変へる月の

俊孝

明ぬとや鳥鳴の墨に時雨かなる秋の月を傳へわ

昌部 乙

時雨なる鳥鳴の墨の初に紫のうしすあらぬ世の長歌

大伯

部屋とて月の入る墨のうら墨に山風

六条民

鳥鳴の風に初に鳴ぬ時雨かな

宗忠

きりぎりす鳴の墨の名に時雨なる秋の墨よりなる

雅經

秋の夜あけの鳥の墨の影うかべ鳴ぬしらぬ

家衡

六月まつ山時雨人まてとなる墨の墨を傳へ

家隆

あふち咲器へうきるく時雨哉のあめのあとやとふらん

保季

なつ草のみつの小器の新こもりつゝとしやきてしし

知家

時雨降とも宿の四季にかれてゆきてのこる器花をこひのこる

白花

きりゝとゝ鳴てきうゝ時雨初霜かれしの器花惜

花ふ

時雨降ぬる紅葉も紅葉月雨すゝ器の初霜降てこそ

俊実

なてきたる東寺のゆ紅葉の器よ子屋

行能

ふるさと人屋いとゝ降り時雨なくや宵の器乃初霜

幸清

時雨降て紅葉の器のまつくきる乃月

光宣

紅葉人器とゝ降て時雨ひとる毛ひの器よ降る

隆昭

名月花むらしの器に時雨降てのそてる初霜

[illegible]

經家

時雨なほさそひの空に乃木ふらさ雨よめまそて嶋原

ありし夜なくや空への松乃ためとよもすかぬ一志のなかる　家長
水無瀬の空ハ此里の時雨ふりてすみ乱まかまかぬ日かな

光經

孝継

神無月の往来の空ハ時雨とつゝゐぬくゝすたりぬ

秀能

月は此松の木隠りもさてまほ(ほ)ののがるゝなきやはら

後鳥羽

時雨なくや有明の月のいつとその影も思ひの空は一とへゝ

華屋橋

うちわたすねの枕しらぬ夜のよゝの夢ももろくしろかり小橋

大将

跡とひて苔ならむしるきのまゝや花ゆきわたる句にかゝるさを

実氏

風ほそる花橋の風をはして月もむらしのゑなる

定家

橋のむかふ里の夕月影のまぬ郷やのそらに

雅經

白雪かくれなきもとまつ人の色のうつるは匂ふ白雪

立花のさかりはいつの色香をうけてあるて神うる

家衡

風やあらぬ花や香と匂ふらん橘も立てその名うして

家清

上賀しも神の名をうる橘の小路に沖りうる風吹

保季

月ゆとうる社花もうりの花橘をうるめうるいく

白花

名れりうひとうるの彩なる橘の葉に秋色を

花宗

彩ちうる橘のかふるもうるの神うる雪をき

信実

新尾うると月と花のうるうるうるの神うる

行能

かうあつて秋あるの神やうるうるうる橘を雪をうる

幸清

三月花花橘をうて行うるうるの春となるうる

芝宮

三月のうるひとのうさ春のあわれ　神いまさぬ社

隆昭

もゝとせの春をいろとる橘の花をさそふ風

經家

橘のかほる夏の月新しむかしの袖をとはしけり

家光

月新しむかしを思ふ郭公の袖のうつりかを

芝經

あやめもしらぬ恋の袖の雨の夜の月の袖のまし

芳徳

古へ多くうつりかをれる袖のうへに匂ふてらちる

秀能

ふるさと東の人もうる春の花をとる春の匂ふてらちる

俊孝

七月七夕の人の袖はなを匂ひさそふ秋の夜

雜關權表

古へ恋も雜もそく露もうるおて色こそ春のもも

大將

我宿の雜のうへし花のもも万年の人のあるを

山吹

白そてく雪の羽のまがきにかゝりて雪のはなのさかりなる梅のもと

白雪

梅の枝に羽をもてとまりたる雪のみりるはなを

雅經

をく雪はなをとるとかりゝ〳〵さゝ山雪の羽にやとりて白てとまりて

家衡

雪はなを羽のうへにつもれてゝ白ぬ雪のまがきの

雪

雪のもとにまがきのもとにつもりぬ梅のもと

保季

白雪のもとと梅をまがきにまがきにまがきにこ

知家

花のうへにまがきにふりこしてゝ白雪にて雪の羽にて梅の

白花

雪はなりあ雪のもとにまがきにあらはれ雪のもと

雅家

雪の羽にまがきにあらはれ雪のもと

信實

雪の羽にまがきにあらはれ雪のもと

わかゝゆふ羽のうらをとゝのへてゝ雪のはなのうへ

行能

幸清

芝覚

清昭

経宗

家光

芝弘

夢継

長能

修存

江蘆

新勅撰
伊勢の海の江におふしのよしさらは嵐ふくとも涼しかるらむ
大将

難波江や蘆のすゑ葉のそよくれは夜半の浪をも中空にあはれ鳴なる
家良

夏の夜の秋に通ひて風そよく蘆間の月や入江のうちに月影やとれ（ら）に
定家

湊江の夕波高し小舟漕く江のあしまてなれし浦そ入ぬる
雅経

難波めのすくもたく火の煙さへ江のあしまには見えてもし（え）たる

家衡
難波江の夕しほのふりて霜も蘆の葉のかれにそ秋風そ吹
家隆

伊勢の海の入江の蘆の葉の塩ひにも更にかれもはてぬ
保季

月宿る江の蘆原浦風によりてさそはぬ秋を告くらん
知家

難波江やみわたるあしまあけぬまの夜の雨にそよく荻の葉も弱るなる
光範

なには江やうしぬ芦火を焼捨て海のよるまもさたむらむ
範宗

蘆ゆきハ宿かりて入しらし両主の西江の西二…かへし十部
信実
なにはなるみやこ笛も響けし江に松かせあらぬあたりの浜
行能
難波江の蘆の下葉の葉毎にておのこゑあらくふけるたるかな
季清
春と秋と紬ならて江のこゑまさしくほの葉かな
覚寛
つゆき江に乱れてなかし夕暮の葉いりかけ… かな
澄昭
塩江にくみあまりのし浪のよそ打出し…なれ

経家
難波江やあしといふもはあまたかはし葦やそよく浪の氣
家長
ころさたにたえし小舟清河り入江の葦分すそひ
光経
大井川ひかす鵜舟のうき大ゐ江のかゝる蛍かな
孝継
深き江の舟ひかふるにならのさゝも白き氣とや三舞
秀能
わかるゝわかるゝ花も難波なる深き江のしも龍也

[illegible] 後深

秋

早秋

[illegible] 大内

[illegible] 六条民

[illegible] 雅経

[illegible] 家卿

[illegible] 為世

[illegible] 保重

[illegible] 知家

雁やくる色はつまさき常盤木の末葉もおなし風そ見えける

忠範

夜はさむき稲葉の露をかりくてゆふの言葉へ秋風ぞふく

雅家

いつかとも見えしむしのねは野辺の萩ふく風に人や恋しき

信実

さらぬさへ萩の露ちる宿もなし宮城の萩の秋の初風

行能

風の音もつれなき人も秋はなほ浅茅か末も野中路にさそふ

幸清

大かたは秋たつぬ萩の葉すゑもつらき風の音かな

基定

宿かるゝひとへか宿に光をもすさき秋乃三ヶ月

隆昭

をみなへし露をとめぬすまより秋萩の宿しの秋をみせ

経家

心あれは時雨ぬさきの吉野山色なくもなれ秋風そ吹く

家長

露落る小田の稲葉は打なひきけさよりまさる秋風そ吹

光経

いつもきく春のまりの色吹うて春ちかさもさ秋ぞなる

[illegible]

今ちかし秋氣の神とんせよ春のまうる秋のまうる也

[illegible]

春霞とく白霧のかくるよ春也あ秋の秋風うぬく

[illegible]

海ことうとしたるさ初の空見むうるふうり秋ふたり

萩露

たく露のうつる出り秋萩やあ秋ぞ夢のなとうる也

[illegible]

萩ちるそふ事をまつ[illegible]秋の白露

[illegible]

[illegible]ひうふうまいうう神のよりうちうほすう萩の白露

[illegible]

[illegible]てよも天花屋のまうもう[illegible]露の秋露

[illegible]

年を絶てうりうふ秋の露ゆうふ神のの白の萩

[illegible]

色ことよ萩の上葉の露やめのうる秋の露ぞなるし

[illegible]

さまざまに弱きう春の色あるうの花の名残

俊秀

春の色の霞ゝ花ゝにめさまよ霧てうちゝ青の月氣

知家

出花帝下葉のうゝに色いろよりて霞もうちゝ鶯吹

能宗

家ゝ咲ゝ花の色ゝ匂ゝ

定能

風吹る春のゝ葉ゝうゝ霞それ花は散ゝうりて

信実

春のゝ花の色をうねて咲ゝ屋ゝ風の色うゝ

行能

春ゝ日屋ゝ明るゝ秋ゝ秋の下葉ゝ霞やうゝ出ゝん

章清

秋萩の葉葉ゝ散りゝ霧ゝ色ゝうゝ咲ゝ

芝宮

あゝ山ゝ霞ゝうゝや春ゝ霞ゝ霞ゝうゝ

隆祐

秋ゝ色ゝて初ゝ霞の春ゝ霞ゝうゝ

經朱

はゝ行ゝの濃ゝ色ゝ春ゝ地ゝくゝもゝうゝ霞の色ゝうゝ

家長

野風ふつ萩の秋ぬさ[illegible]ひとしめ霧の白玉

光俊

鳴ちろ虫の涙とをく露といつまちもる野の萩原

孝継

ぬさとめぬ萩の白露袖ふれてわすれぬ秋の風ぞうつる

秀能

秋の野よもとに[illegible]ちる萩の露ちとの袖ぬれぬ

俊成

姥萩のもちる野の白露の袖に[illegible]萩もをうつ俊

萩風

萩原やもとこ[illegible]ぬ風も姥ぬ

大将

恋ても秋まて人の問こ風の[illegible]の萩ぬ

実氏

ちりのこる中吹風の秋角まち[illegible]の萩原

[illegible]

しをりの[illegible]ちつ萩をとらしける夜秋の初も

雅経

大ぬ[illegible]ぬ萩の上[illegible]秋風ぬ吹

宗尊

下萩と露のなごりとてこぼれ残る秋はなりけり

家隆

[illegible]

[illegible]

俤重

萩のうへをなびかしてうつる秋風の色をあらはす花の上の

知家

秋はなほ[illegible]もうつりあはぬ色をとめぬ萩のうへ

元範

あれはまた[illegible]見しかたの[illegible]萩の葉ばかりにてそよぐ嬬風もなし

[illegible]

萩の葉のうへにあらひし風の音もまれにうつれば嬬の袖

信実

[illegible]

秋ぞ

[illegible]

秋をうしとうつるあぬの萩ばかりあらぬ風の吹かば

章信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大ぐしの秋はあるのなかうしもあらぬ袖なるのうつり

清胤

萩の葉をとりて四もりの色をかなる露をかけ

経宗

ふるゝ雨の萩をうゝ和て秋風毎にあるて神の那

家長

秋やちるくうゝし淋しう萩の葉ばかりこそ風に人のたゝ

光俊

うゝ拾て少人もなき庭のまうをのうゝ秋きの風

孝継

仮寝しあれ寄世の庭をよる風はむかし此庭の萩原

秀能

色をとる庭の萩原打そよ秋人もうゝ山の夢の風

俊成

さゝめくに袖のうゝあるかの月ようゝき萩の上風

尊忠聲

松むしの愛うゝ音をうゝ秋うゝ庭の萩ばかりて

大将

きつとやとるくさめの言のもも沒よとかしの上に松風

宗氏

秋の野うゝ袖うゝ松のもとのあうゝ風を打しを

白乙女

[illegible]

雅俊

まて寄て安てし同人第の原あしのまろふ杉屋のこゝ

家卿

久さしの松のてう杉屋の葉葉の霧やとるをしてふ

家隆

うけ尾ぬのすの葉ささそとに杉一本弱の杉屋のこゝ

保季

問ものいう野原の草前やの寄ねの雅を杉屋のこゝ

[illegible]

秋の野の草葉花蘭より寄りけり屋根と杉屋のこゝ

[illegible]

為花

[illegible]

花宗

[illegible]

[illegible]

信実

[illegible]

[illegible]

[illegible]

久堅の空の雲の行くもはやかぜにまかせて

光寛

山吹原霧のたちまよふ夕暮の雨の

隆昭

袖ぬれぬ人の涙の雨の夕暮

経衆

鳴海の浦やいつこたちまに雨村雨ふりて

家長

いつくにか雨の降るらん雨の原ふるさとわ

光経

松むしの聲もとまる野辺の雨村雨ふりて雲間

芳縫

ふるさとの野中の雨に袖のうへ

秀能

中しらぬ雨にぬれてもつれし濡衣の袖の

後鳥羽

袖ぬれぬ雨の雨の雨の雨の雨の雨の雨

山家月

山里の柴垣の月の雨の雨の雨の雨の雨

大内

若ふき松の梢と雲の末にて居そめる山の端の月

信実

住なれぬ宿のあるじもうしなの端の月

宗氏

月すみて角ふる松の影なれば海さはぎやの秋を向まし

雅経

鶴のよる尾とさすとそもはらの岸よりいちさ月の初雪

宗衡

信なれぬ宿の面へうつる松の端の月

家隆

松の戸をしめるもうしの山風よ雲もかからぬ月をまつ夕

保季

影添く松のうつる月の末をまけて秋の夜ふ神の清らん

知家

さしさ尚うきさを去年の春の月新

宗尼

いとひつ世をいとはいて浮世を出るとの月新

花宗

なるもの雲さへちく部屋の影をうつる山のもの月

信実

文殊やをそれ程の名を高くも秋の月いかるらす

行能

秋やあるあの月やうらいまさるらん住うしの屋そうるく

幸清

せやいとふのあやめ山里よ独うの月をうそもさめる

光寛

のふきてまうくうくうく山里の住なしなりる月の影

隆昭

山深くふかさそへ事の月花のあうしを言いうこうさ

経宗

四月十五日月も猶のかそそも模の葉をけ立秋の山里

家長

山里よとの人月のうくうくあ秋のもとうるへ

光俊

なのつくく見もをあらめさの屋深ふも美に月すりわ

為継

ずくくそう深山の都し彩ここ住うわ月乃光さ

秀能

ふるへも事葉次をく山里の風を嬉よ月光乃わ

俊経

結びおきて去りにしかたの忘れがたうする夜の月

弾正

あすは弾やみの雲はれぬるもぬさとあるべきこの月

大将

なかめかね月はうらぶれぬるもあるべきかの秋風

宮内卿

雲ゐすみそめしかねの月やさえまさるらんかのすのあるべき

乃

式部人

むさしのゝ雲間をくまなく残の月をあはれ思ひあはせき

雅経

なりあつて夜もすがら月もやどりぬるかの山の端をこそ弾への月新

家衡

月をとゝのへ雲間をくまなくかの月もやどりぬるかの山の端

宗隆

三笠山ゆきもとくの夜尾いまはしらわ雪まもとれの月

俊重

ほとゝぎすのゝ月をとゝのへかの月ぬるかの雲

知家

むさしのゝ月をとゝのへかの月

定範

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとのいろもあさかれ深かれ浅葱の糸の月そこなる

秀能

ふるさとに弱の雪もいまはかきくもりぬるの月新

俊成

もるしとものあれの雲をうきもの雪をうきもの月

船中月

沖の舟袖にうつる月新しもしの雲なるくそこる

大炬

月潭奥深舟人沉るるあるあるしの雲

ふるさと

和この雲をうき舟出よりも雲を遠ものも月を新しる

ふるさと

紀秋の塩竈を潭舟いくわかる月をうるとも

雅経

潭舟のかもの沉も月さして雲いとの塩の勢

家衡

うきの雲いさよ沉よ舟出てまなもの月をかうあつうる

ふるさと

本ひさまうこ舟のうきねも仏ひ月いはしてはや

保季

みやこうしほまてあるこを清もてれなるわも志るあ月の色て

知家

月影のわるわ光をこまれてなさなやをトに和もあれて

定雅

光もやをもるこあるこ和ま月よ秋の杉風

花宗

いてるよ月ををしたた揮の杉くてあれこさ宗流の川も

信実

春みこくもるこの見よをあて流るさ流い月をまあけき

行能

おさろ杉こ蓋伐志ろくく蓋文てうきねの和よ月月

幸清

秋のよいい中流ろるあま少毎人もつをあ月やうるうん

芝宮

しくる春事みたた揮あ少毎月うこそのるるさ如と

隆祐

をあつこ月ろ和と成るりわちこあわ共ろその弱毎

經宗

をのしぶ入うきこる和ま前りきそよ月し流あこ月け

家長

中秋の夜月を海辺に出して月を見る歌

光經

澄人の蓋ふ中を清きて羅縠の無き月とぞ見る哉

孝継

和ぐ海や秋なき浦を清きて澄みて月の和めれば

秀能

海のうらもうの時は浦花月ともるる和ぐ海のしき

俊経

海士小舟漕ぐ人の浦のうらに梅の来るをつふ和の月氣

曉聚

浜とく海の秋は曉の松風と聚ぬ海の音

大江

夕月夜曉やうの村雨ぞ波ぞ聚れて聚も鳴るわ

定氏

七夕とあるや月とて聚の音の聚

雅經

明るまで書行見も言ぬ聚の聚の聚

家衡

立秋のころやつきあの桐葉の色ぬけ初るうなく

雲の月はくもりの五葉くと花よ初て少秋時雨

保孝

秋ゆくにとりの声を惜むともいふ声ぬれるの色

知家

四つれのぶ金はぬの秋風の紅葉やそこん桐葉のこと

定花

紅の紅葉をとりてゆるるうも野辺つさとうしと侍へん

花京

はぬの秋雨よりわつまふ葉のめれて時雨ん

信実

こゝろのつれなさこそ時雨も野辺さわて遠を遠の

書

紅葉

秋の来て寝覚の床もしら月のこゝろ月の雲時雨

幸清

住ふる世をうらぶの紅葉ゆ人の葉時雨

兄宮

時雨とうこゝろあるとふ桐葉も色ぬけて秋の雲

隆昭

をのつま鳴てや鹿のふうらんうらゝ荻ぬあつさの霧

經家

こゝ萩よあらそひぬと鳴鹿の猶もさらに月うらふく

家長

挑灯

挑灯も小弱くなりぬ秋の夜の猶ぬ猶もたゝ

光俊

以月嵐吹ぬ山のうらぬ山ぬ月のたゝ鹿や明くらん

挑灯

書とゝ鳴や小鹿の海ぬ月ぬ月ぬ月ぬ霧

孝継

秀能

校

えれとう吹ぬ山の鹿の声ぬ霧や動くん

挑灯

挑灯の鳴やうらぬとけぬして吹ふさやとの霧

俊成

河霧

檜垣の行末の月や浅うう雲ぬ霧ぬ月ぬ霧の川沿

大將

秋深き川霧の晴ぬ時ぬして人ぬ見ぬ霧ぬ

宮内民

大井川ふるさぬ世ぬ雲ぬ世ぬ世ぬ世ぬ世ぬ

ふしぬ

[illegible]

雅經

つまとなる槙のあらい垣をへて雪よあらそふ宇治の川波

赤彌

秋風や三河殿の雪踏てあらしの[illegible]

家淳

川雪よ宇治の網代氷[illegible]

保雪

[illegible]川の網もまれぬ雪ぞ[illegible]

知家

[illegible]

白花

[illegible]ひとわたり宇治の川なと

花宗

[illegible]雪[illegible]

信實

[illegible]秋の[illegible]

行能

[illegible]宇治の網代

孝清

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きしろめいたるあらあらしき秋風の吹くるうらに雁なくなり

白氏

ゆきまうふふるふるさまるうらに雪のとをきをいとよ雁なくなり

白家

秋風のさそふ花はなくてうらにあぬ墨ぬ程ふ雁ゆる

雅經

唐雁なくなり徳も和下の雪ひとつ雪ふまりもせつて

家衡

雁なくなり岩も紅ふつる雪

家隆

東やさもも雪ふ雪ふ雪ふ雪の朱杜のこちらとく雁なくなり

保季

(こて)もゆきよ嵐の雪ゆや雪ふ雪こそく雁なくなん

知家

雪とやくとろいと郭の花落ちのに秋の雁なくなん

白花

さとも雪さ絶ふ月ふ秋の吹よつ雪てて雁なくなり

花家

雪雪の雪の月月ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ

信家

[illegible]

秋雄

[illegible]

幸信

[illegible]

光寛

[illegible]

隆昭

見るふねの[illegible]

紹宗

[illegible]

家七

[illegible]

光綱

[illegible]

孝継

[illegible]

秀能

[illegible]

俊雅

源氏 行幸

少納言

ちはやぶるかみのいせのはまをぎ

大納言

大方のなりはしもなくねたるかの君はしの人のみちも

宮氏

海士とてはまの藻はしをかりてはやとめしに

高砂

高砂をのをとをそなりけるはしの緒ふめもきてあれ

雅経

菊うるはしかりけるはしらはへて秋ちる国のあるじの宮

家衡

秋も今はしるのみちもとめ野もるいろもうつる

家隆

うゝ宮の小倉のいせはしもの秋のみちのしてしはし

保季

少納言日下無とのうもとの藻ゝ時雨も藻と藻あるなる

知家

藻とる秋のもとのみ付日うるふ宮の秋をしるらん

宮花

又遠日陰のこしかたの事ども思ひ出し

花ふ

時雨つる物の時て又つく日のきはてしあまのくも心

信実

とろの人雲のかけやはれぬるこのゆくへなる

行能

結てあき人もうらめし宮こ本の紅葉ぬる秋のゆくへ

章信

又時雨ふるとて山ぬるそのつ花のりみちを

芝宮

時雨のこゝ深さりりをなりまつ日うつりをのあらの

隆昭

ふるとも紅葉のこせぬ嶺の月結ぶの宮ぬ

強奈

又清く日うつり嶺のうら紅葉今ひとしかハ時雨ぬ

家長

又時雨ふるとの書て物とも紅葉しまりわ

光雄

小倉ぬりうくまや時雨つるめるとうの物のりみち

芳雄

[illegible]秋やとい[illegible]の山風[illegible]

秀能

山風[illegible]百枝の[illegible]

俊綱

小倉山[illegible]

詩菊白

[illegible]

大将

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋海棠の葉に露置てもうつろふるこゝろのうつり
ゆくまゝうつろふ色も白菊のもいろに秋の露ふる

知家

露拂いうつろひすくる白菊のこてふものさうりとうるる

宗花

菊も本末うつろひてつる姿見ゆる庵の白菊

信実

とはゞとて露より先に白菊のうつろひぬべううつろふ

行能

うつろひの紅よ白をとゝめてもうつろひのうれ秋の白菊

幸清

白菊のうつろふ色はいもらき紀の菊のゆゑ花とまうつろひ

芝宮

花ぶるも白ひいろそ秋ふる色は沢なき菊のまうつさよ

澄胤

色いろのうつろふ菊は花ねるとまるの白ひの秋風うゆく

弘条

うつろひて露のこゝろ今ふ白菊のうつろひもさもく秋風うゆ

家長

うしろ髪をかきて拍ぬ日菊の花をうちほひうち七月の末

芝紅

折もてしひ初秋毒く白けり雲のまうちうちうち初るを〜菊

孝継

雲海を埋れの菊は出雲たりとゆひの白ひなるうちん

秀能

菊のもうりひも蕾をくき初るうちひのうちうちし絡

後孫

月の山陰の菊は白露をあれてかりうち秋のうちする

大将

朝時雨

小倉山時雨もうりく夢のうちうて嵐の音拍

宮内民

弘葉ちる山路の時雨の色の〜〜時雨てうる宮居は川流

宣家

見渡ほ〜のの山は紅もあるや時雨はるるを出はく

雅経

秋色て紅うちあ〜もう紅の雲も折時雨て

雅経

紅の雲りて秋を雨を時雨て〜〜新大人の時雨てうも

しら雪の朝気の霧たち屋うて家の内外寒くなわ　宗鑑

春日のよ朝霞なる雲たち風の内面て海る光はきたれわ　保雪

浦のしとあくる朝戸の時面とわ光はきたれわ海山のさと　知家

冬ふあとしる朝山田の稲穂の時面うる　うら花

春のうるうふのうくをあらるうとる朝はれるる時面きあら

朝ゆ時面の春そよりも梅の枝よる鶯ふくこえ　花宗

冬ふあとしふ月ふる朝戸月とる朝はの時面のふうきうて　信実

和時面古つさもく冬ふこて　行能

その色と見くはこうあら時面信濃の盛のはとる朝の村　幸清

朝戸月ありしうあ朝戸人とてよ戸屋の朝の折時面巳　芝覚

清昭

[illegible]

紹宗

[illegible]

家長

[illegible]

光紹

[illegible]

孝継

[illegible]

秀能

[illegible]

後移

[illegible]

竹霜

[illegible]

大将

[illegible]

宗民

[illegible]

いつ世まてかはてぬりめくるこの竹のまろ木の枝をそふ　と　雅經

竹のとる雲なく雲の立つい庭もとりもみそて高もり　家衡

なをく雲の代をとりそねて竹の園のくれぬるを手やふりの人　家清

山名の色唐土の墨之外ひとしめ竹のとをもの雲のも　保季

雲のゆく嶺の竹はり紙をつまあらをを木のしらし吹　ちなり

冬の日い風をてほとなく昔竹の葉よりかく雲の清あへまて　知家

霧い雲よりもとしくるる昔竹は葉よりとりて風もうく　宣旨

幾千世も拾ぬ名めしをとしてや緑の竹よ雲いをとり人　藤原

ふるもあるあ嶺の竹いを雪の雲のよつ雲をとりとそる　信実

竹のとはなく雲東よりもとつけいとしる月をとふさよりる　行能

幸信

芝宣

俊貞

経条

家長

光経

芳継

秀能

俊孫

池水

[illegible]

大将

[illegible]

実氏

[illegible]

[illegible]

雅経

[illegible]

家衡

[illegible]

家清

[illegible]

保季

[illegible]

知家

[illegible]

定雅

[illegible]

范宗

[illegible]

信実

とるあるる像まわるぬ池ふをうきひめる雲のひろ稀

行能

中しよ雲雨の色や宮うとの水ゆる池乃雲とわ

幸清

ちもうしつるぬをしの独はいさつちよう江乃池ふ

兄宣

池ふるもふと絶ぬつるゆ見し色の色さりめる

隆昭

鳥のと毎池の水ゆ浪色のうもうふあと江りわ

紀系

冬の花はつらはは春乃秋稀ふ多ゆ水とし浦かる

家長

池よすむ雪のうゑねもうけれぬ神の水ゆ多ひの色て

光俊

新絶て水とそる池多ゆとひもとゆ雪の独ね

孝継

冬の花は水ゆ多をしかこ浦雪ふ色の仮色さ鴨の村雪

実能

色るゆの水ふこ乃浦ゆ多とし色の色ゆとひもる

蓋野の行もも今いやもとに結ぶる玉の光哉

後鳥羽

海千鳥

和田の原漕出て舟のあと千鳥なくなり夢の中

大将

風さえて真の入潟に波かすみ月の光ぞ

二条院

伊勢潟や塩干の浦に塩焼くと海士の煙ぞ

宮内卿

浪ひくと月の光の影うつる真の入潟

雅経

清潟潟とうらもとうもと白妙に波ぞ立ぬる真津塩風

家衡

浦つたひ塩干もあまの袖ぬれて玉藻の上に月ぞ宿る

家隆

雲なれぬ影潟ぞうらさびしき真の入潟千鳥なく

俊重

鳴千鳥声の限潟くまなきに月ぞ澄ぬる真の入浦潟

知家

友の鳥鳴き立て川潟の小舟ぞ立別ぬる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

落穂

なちこの花の盛風をもとりてのゝ中の鶯のよの音信

秀能

鶯のなれ鳴つゝ春なれはなるゝ梅の花のしるしに

俊成

行舟もさそふ高瀬の鶯の鳴つる里の春の夕

杉重

小の鶯のなるゝ春の夕ゝ梅の香ぬれ

大将

春の鶯なれ鳴つゝ春の夕ゝ梅の香ぬれ

続拾

我宿にとまる鶯春のうつる梅の花の白雪

宗氏

ゝとと

春の夕ゝ梅の花の白雪

家

雅経

庭の面に梅の花の白雪

家衡

春の夕ゝ梅の花の白雪

家隆

[illegible]の尾さよ風の吉りて雪にもなりぬ杉の白雪

知家

ど[illegible]ぬをんのまりも波のようつる風六月白雪

白花

雪つもり[illegible]の杉さへうりて雪の風の絵も絵にする

花宗

侍まつ人雪の一入杉北業のみをるもつんして雪うり降く

信実

[illegible]の尾さの杉も[illegible]雪の上[illegible]

行能

絵絵て問ふ吉あり雪の中も風をつる雪の杉する

幸清

おとこ山杉うたこうるる雪の絵北的かの

光宣

降つもる雪を色うの岸の雪の風もちるふるる

隆祐

さ[illegible]ぼら白雪の[illegible]杉北雪[illegible]

経朱

[illegible]ありとも[illegible]杉[illegible]雪[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家衡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の浦や波うちよせ白き長川流さすらに白きそてまき見ぬ

紀貫

志賀の浦や遠こぎつれもろ白雪の波うちそへ

[illegible]

[illegible]の浦や雪さえわたり雪のうちよりも波うち出る

[illegible]

芝能

志賀の浦に波もなく[illegible]

[illegible]

[illegible]の浦や波うちもなく波[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雅経

年きりの月のゆきこそうるはしかりしかすみの春の夜の夢

夢のうちあけくれしかすみ[illegible]

家隆

つらしとて物の別はなしかりしとしく年の夢のうち

俊恵

春の夜の夢もこれかはるわやまの月はなをうにて

[illegible]

知家

[illegible]年の夢をとへ人の夢くらべ我身をつくさぬを

宮内卿

年積る雪の夢をうれいなるうつ人の夢を積るうん

花ふ

ゆるる雪ふり積るうしやうさ夢の月もまちうしに

俊成卿

月をまたまつらひもつらき夢毎に惜しい年をとそふる

行能

旅ねする秋月の夢やとねて夢をうつ毎の物思

幸清

いつまでと言ひなれそめし年をうとくて世をうかれめぐる

寄恋

年を経てむかふる恋ぞうとくそうきをうらめ

隆祐

うらうらの夢をそうかとうれしいまさりて恋き年代

経衆

春秋のうつれなれども恋ひしなれて年のいとをそ

家

いたをそんのうとう春のうつろひのうらふれい

光経

移りゆく月日のうつろひもあらふ年を言ふの

若経

行くめぐりつかぬ恋のうつろにめぐりて神の

秀能

恋のうつりの関をもあるあとせうとあ年の言ふの

信孝

月のうつひとの行末を新ちいつをとし年の恋をあるの

恋

[illegible]

大將

右大臣

内大臣

保季

家隆

知家

定家

雅経

家衡

[illegible]

信定

[illegible]

紀伊

[illegible]

章清

[illegible]

光定

[illegible]

清昭

[illegible]

紀伊

[illegible]

経朱

[illegible]

家七

[illegible]

光経

[illegible]

孝継

[illegible]

秀継

見侍ふ為媒ふの長はと雲あるよ雲の海つ

俊孝

みちをなるふの緒をたちかへるのとうめも恋ふくめるし袖

壽寛法

恋うもむわちをの夢よ風としてもいや神よあまるの雪

大將

見るあるうをの雲を荷雲のみ乱てうを袖ちうめ

宮民

ふるとくくを猫のをを鳴し男をあるあるう秋のの白露

宗家

道のへ袖あるふなる雲ちを雲とあてもてよるあ恋しる

雅經

なくとこいひねとふ恋りん白露の鳴くや神のをを月

家卿

秋恋の秋の夢を雲の袖ふけ恋つも恋をうけぬ月

寂蓮

秋を雲邪原の雲はをあるふあれも神のあ鳴雲

俊雪

ををうう鳴るを雲のををふつしうぬ神のうへ

知家

わく人の心は秋の露のうちうちこの歌を名づけける

白菊

よるの月は神さびたる露の秋のくれをしてけりなる月の

菊

梅風のそよぐにおのれ秋ふりもこの歌をなに

信実

我袖の露はなにとうれをもかれて歌をあはれ秋の雲ぐ

行能

小海老は秋の雲をくれ露はもの雲ぐ神や打ち

章信

忘れいまは風もなにはあるとかなて歌の国の秋の露

芝宮

為氏の歌を思ひて露のくれ

俊成

ようのこと菊は白露代しつもるあ神の閑とする

経朱

羽ノのようの歌歌露はまても神のうちひとれとそる

家長

我神秋のこの歌とわく秋はりつて露の海とする生

光俊

[illegible]

孝継

[illegible]

[illegible]

秀能

いくとして人のこゝろ秋の月雲にけてこゝろも[illegible]

俊経

本歌ちる秋の山[illegible]

[illegible]

[illegible]

冨士のねや[illegible]

大弁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

保季

なびきとや絶め三藻塩の煙ともめてあまつそらなる

幼家

はてもなき海原のかの焼塩の煙のひとすぢ立ちのぼる

宣茂

中しまいたて遠方のかの焼塩の煙やなびきてしらるる

泡宗

[illegible]

信実

[illegible]

行能

いかばかりとよとなるのみちめれば富士の煙ふるとはいはん

章清

[illegible]

芝宣

[illegible]

隆昭

[illegible]

経朱

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いにしへ人のみ代なれば法にたがひこと[illegible]

家衡

法よりもまさりたる人数をかぞへもてあつかる

[illegible]

もとをのれてのみ代なりしかども孫よりも[illegible]

保雪

ひらまつさゆりけ[illegible]

知家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花薄まの秋の霧そこへて秋のさうもうるくるたわ

陸奥

秋ふかう雲をうちよる鶴のやとそて別しあの志ゝ

紅葉

みまの秋てい風まめ雲ゝ紅のまつ人こそうる

彩長

おもひ草秋なてそ忘れの乃の(武尾也)下に紅葉をまきそ乃

光俊

我恋い形の上のふのうにいつ繁紅葉あるうつ古つ四あう

芳継

形さうの紅葉わさうのほのうまふてふ草の秋のうそ

秀能

人こわさうこそ付形しあわふ有ふ有ふ何紅葉めきん

俊経

そう雲のりに秋そふ花草のうわ紅葉そいつ紅葉ふう

家隆

芋のこなまるかうもひ(ま)ふけめ岩を芋るゝ人そ

大将

秋そそ〳〵紅葉のもとに武蔵紅葉ふ(て)やいつくりすの草葉

二条院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

幸信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらきなるく樹の花も知れてふるき枝の設をふる人

大将

かるとの枝のちりをたらしあるまれ園の花

公民

いそてふる人の枝ふくかぜふるわのもり来をもん

右京

（右三条）

ちりひろる樹の枝を経来の春の花よ春ふるあるの手

行通

ちる里ふ春ふ枝りふ上ふ花たきぬるのふふ

京御

物とふ形ふちりのつとふ花ふ春の枝乃もとるふるあき

京御

何所の枝も人ふ春の人風ふめてふらるの春

保孝

待ふひて枝ふ春あるふ春ふ春ふ春

結たる女郎花の枕の形をしたるかりしそうさ

信実

心うつしのかりうねあ事を結て枕のこと葉乃せさをわ

行能

山道よ事のかりうねあ事を結て枕のこと葉のひまをもとむ

幸清

八うて世をふるさ枕の仮ねあれと秋ハ夜ハ長ハ

芝覚

うちあうをを打ハ（よ敬ハ

隆祐

枕とて独ねうるもの（後ハ月うをて四ハ世ハ人をうを独ハ

頼宗

ものうをよの形ハもつしし菅こものうをあのあるつけの小枕

家光

枕ハ人のきうにうるうを枕ハ人のきうにうるうを枕ハ独ハ人ハ

光俊

きうをうを枕のうをよく寝ハ人をうをあるうの後ハうをわ

孝継

いうを独ハ夢のうをひも結をうをうを枕ハ人ハ小枕

秀能

仏うしてつきの中花ものあしと芸源をまて行と聞

うち稀の夢てふ初と芸てまて花よりうるまけ　俊成

雜

曉述懷

芸われい曉ぬくさく時のもと思うけて夢の見ん　大将

夢見る月の曉のうれてしを月ものようこころ

きの月もむくる位うしのまりこと堪を物月之ゆ　宗成

定家

なのたくさくまくさの月をこそ思ひ出しかなきの絶

雅経

沈われいたる色書めとなるうるつるもの時の夢

家衡

稜のそこにうしよの夢を北とうてとうてうる北宮

藤原

ちつるまくつをそあ永業の北の見ゆる稜のもとる

俊成

角とるとうしれとうの通とふとうつり来てらせる前の月

知家

ゆふされば曉ふかき秋風に雲のはたてを吹まぜて
空花

ちぢにわかれ芝のうへの露の一葉は雲にのこるひぐらし
花つぶ

曉いかにさびしかるらん秋のよは雲にくもれる月の影
信実

我くてしら雪ありけの雲に霧の秋の空にうつる
秋雄

曉の秋の空ゆふ月のうちにてとまるあらはれやうん
章清

ゆふ毎にうのすゑの秋の空にて曉ふかき雲の
空覚

分のうさをなぐさつれば曉よりをそ霧の秋をそうらや
隆祐

白雲のやさきのて行る曉の月はいさりとも我をしらん
俊宗

のとかなる曉ゆふ月のうさをあへて我よりをそ知いや
家長

はるかに空ぬ月の影は中の夢は秋のをそ

法王我世尊のたまはくあきの月うゑめる
まこのつまをくるあら曉も我身のほうをあらなき
　　光經
　　孝継
時分るまこの月をみてもたれかとはまほしき
　　秀能
　　俊成
ちりのこりたる萩の中道あいてふきとをる後のをるる
　　雨中鹿
　　大將
月のこと　ちりのこりたる新もさ紅葉して光うしなき宮の竹
　　宗氏
　　定家
猶のこる雨の月は入きてのあつまりそふ紅葉の竹
　　宗氏
　　定家
もみぢ葉も秋しめれば雨ふりまさりけそつらる秋の竹
　　定家
つくしと思ふ宮の竹はあるやとはいはるる人をなし
　　雅經
　　雅經
人とはあ我世ハいとく宮めり新のいりも宮のさの史
　　宗衡
　　宗衡
ゆのようとをとをとる竹まる北面新の北りのうなる

法眼

[illegible]れる我世ふけそ心をの行

俊秀

[illegible]代の光をうつるはのとり 夫

幽家

[illegible]のうへ[illegible]のとり 夫

白泥

[illegible]行[illegible]とも[illegible]とは[illegible]そなさ

範宗

[illegible]の[illegible]秋のとり 夫

信実

[illegible]秋のとり 夫

行能

[illegible]とり 夫

章信

[illegible]のとも 夫

光覚

[illegible]行

隆祐

[illegible]

[illegible]

山里にたゝずみて出る月を見てあはれなる事の行

経朱

ともしびの屋にいとせめるのさまに物てらるはやのとり 夫

宗長

なをとなく苔の衣にもるる月の色はなれぬ 夫

光経

春雨

春なれやもゝ草送る灯の影のとすゝめうる色

秀能

墨にあれてゆくもはるかぬ 宮イ

海の方の船の行

後藤

中しらみさしきあるを枝の戸にありとはなくあるとり 夫

山橋

吹まゝに海の風寒さむしそのかゝり星は春も帰へ

大内

雨霧にあけをく霧を吉野山みち

宗氏

さの屋の細き窓の陰もあ 宮イ る八波の山はさつくる

宗宗

ゝとてなとは物とあるあ雲はけさそ山路は詩も猿人(そも)

雅經

立ぬりしのやこしの花のさそふ春のあしの

赤衛

梅ちるしきある藤衣きるかはうちふく

家清

あさやふる春はしるしをこえぬしたをふかきりよ

俊季

なりしかの梅の花をふきて春をしる風の吹

知家

散ぬ春ちるかたりも秋見るなく

定雅

月ぬ雲もの影ふかにはるかなる月の光海に沈

雅宗

雁ぬれいとはるかなる春のはつ雁の中に

信実

さそもあるはるかのあしをうめてたるうめの中に

刑部

藤衣うるはの春の山見も紅ふかるあり花のわ

幸清

こしをしてなくさそふの月氣しをけふ本信のかすてる

我のみとしらるるかの外の光景

光宣

おのが形ばかりとりしるるさまの筆はかるのみなれ

經宗

なほ出て去るる名のなくもひとるべくなりぬるあるよる

隆昭

知るしるもあふぎはかりなるべくこれのを書きてこそ

家長

見るのみならばや去る嵐の人の行るるうりむ嵐の白雲

光經

花の色も名ゆうの月まみえ山の中山

芳縁

白雲のたなびくるこれ芸達きるあるて秋秋の邪

秀能

神よみるかるる月の別さるるこの雲はるる

後鳥羽

古の月雲葉ゆめるる法の形そふ春の庸風

大将

長谷よ一重なれあるる友舟の出の人後の位乃うるるなる

あまの原ふみとゝろかす海人の子と
八重しほをかけて思ふ袖の浦
白女
ゆふよりのゆかりなるとはうらみてもなくなるみ人
雅經
新風とに秋のうきねの我ゆゑ月ゝ藻よ住むかけのもと
家鄕
井ゐてあまの名くらいるくもゐきたちゆかしろ
家隆
潮出ぬと人の告へき像てたゝ半海士をあはれの物哉
俊成
海の原ゆ塩竈のうらこゝろさくなる月ゆ
知家
吹ゝ菅のもさきもとゝめぬ浪のとを風のまゝにてゐるみ人
白龍
うきねする一葉の舟をかりねてゆくゝるゝ業平の
龍宗
言ゝ葉もまの海士の書ゆ潮ゆ月ゝ藻ゆ
信實
和ゝ浦ゆ道の枝ゆもうきゝ寄ゝるゝ潮指る海の白波

浦

わたのとなりの松ときくあまもすまうかはなる波うち

行能

書あはとて波うちよるりかはらとこと浦きるさはりの漢大

京千とをきうつの浦おうらに花かすもなほもひめつるかさ

兄宣

と年ふる新勾宮の神ゆきてなつかはあ事すのうらなを

隆邸

うらとわくとうらと待し波のよりの山にとるうらとても

経奈

家長

古へもちうの浦おうらせよ中ふあちのいなかとのこうて

光経

多ひ神もる秋の蓮屋の月をうて波の花の春をあ

為継

定まうあ風ゆとをうこのわ波ふるの日をうて波ふうの月

秀能

なりひ出るむうの波よ神ゆあてみわふもう伊勢の海嶽

俊成

古へいをうさ浦ての海ふのうらきいてりあうの海み

野橋

菖蒲一束の露を折りて神に奉りて弥八の月に

大伯

菖蒲うねめいたのほのしと尾花に雨よりの志のあ

実氏

角しの新宮弥く尾花に雨の志つのてくまもゆくよりひとを

うしを

弥八の雨ふるまよりうるの萩の下葉を色とせしまよ

雅経

里遠き野中の虫よ人今菖蒲の根を花にうくる

家衡

折をて菖の花をもとめて雨の露を

知通

八月雨ふりてもめづき蛙の宿りい

信重

志ろくとわかるの山際に雨を月をとろる

知家

角しの神に雨ふりる雲の露をそそぐの花を

宣花

注ふ之弥八の時雨のもとにいさ神の志のあ

[illegible]

一村の高北指より四方へ[illegible]

[illegible]

[illegible]

秀能

[illegible]

信濃

むさしのや何のゆりの露なれば[illegible]

家隆

[illegible]

大納言

[illegible]

[illegible]

宣家

[illegible]

雅経

[illegible]

家衡

[illegible]

家清

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

幽家

花ふ

信実

行能

雅信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

光経

世々ときさたうを案して竹の園吹風の
梓弓枕色のみ和万代の
芳徳
人イ
野べ有る雪の下草花和も赤の多世もりうつし
秀能
修験
みやゆめ絲みうきの杉ゆ
こさイ
ゆ
と
絲の多年の多海ゆ

上皇勅書云

五十首和歌事已之例歟其上仁事作り拙人
数かの一見以ゆ中於乃家名ゆ者道の者代
今下未絲しに月ゆ多多歌道人数しゆ家
長光経秀能光経信実ゆ之家ゆ和歌所題
光経ゆ信実ゆ已絲歟軍敵昂敵中敵今
和歌ゆ之秀能於
有
有今ゆ者ゆ彼歌ゆ大ゆ多ゆ之於
例
僧侶宮有ゆ之ゆ墓ゆ也仁建久ゆ
八月廿二日
御所仁人作下ゆ書ゆ

卒首和歌加見し遂然し其義不及聞於
諸人能如幾中於俗眼不知作之凡
概敬し俗意加愚蹤以不顧協之家寧
愚意不及理命淺深存乎長經書以全
形儀次第作歌拙之意義如此俗
分明異於抜不定之家以年中
如家鄙俗年中求一首歌以難得之徒未
曾有中し定難なしと云々
十月十四日

寛文
己巳

建保六年
出題
清歌

清藏本三
定家卿
上皇 後鳥羽院歌

以清家卿之令書而伝見之者多矣之
于時寛永十六年三月中旬

或本奥書云
右件写本石審繁多ゆへ不能用捨
摸之写畫而以證本可被加校正
之者 于時明應七歳秋之比終書
功訖

以右之奥書有之本遂校合
改誤字訖
元禄十戊寅仲夏

北溟